

消防団員の公務災害発生状況 (平成28年度発生事故認定分)

1 平成28年度の公務による負傷者等

平成28年度中に発生した消防団員の公務による負傷者及び疾病者(以下「負傷者等」といいます)の人数は、1,166人(うち殉職者1人)*となっています。

※平成29年度末までに基金が支払った人数です。なお、この発生状況については、本誌2017年No.205で速報値(平成29年8月末までに支払った人数)に基づくものを掲載しました。

(参考)

平成29年度中に発生した消防団員の公務による負傷者等の人数は、速報値(平成30年8月末までに支払った人数)で、1,168人となっています。この発生状況については、平成30年度末までに支払ったものを本誌2019年No.213で掲載する予定です。

2 活動態様別に見る公務災害の発生状況

活動態様を「非常時」と「平常時」に大別すると、「平常時」に発生した公務災害は全体の8割を超え、「非常時」の公務災害を大きく上回ります。

活動別に見ると、「演習訓練」中の事故が最も多く(800人、68.6%)、次いで「消火活動」(177人、

15.2%)となっています(図1)。

消火活動では、消防ホースや側溝などに足を取られて転倒する、足をくじく、トタンや割れた窓ガラスで手を切る、などの事故が多く見られます。

3 「演習訓練」時の事故発生状況

全体の8割近くを占める演習訓練時の事故発生状況を詳しく見ると、次のとおりです。

演習訓練での負傷者等は800人です。このうち、694人がポンプ操法による事故で86.8%を占め、高い割合となっています(図2)。

また、演習訓練時の負傷者等を事故の型別で見ると、「動作の反動」による災害が463人と全体の57.9%を占め、これに「転倒」(115人、

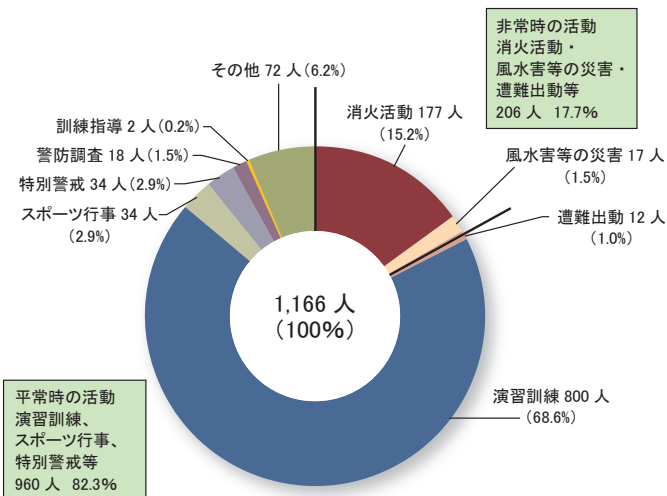


図1 活動態様別公務災害発生状況

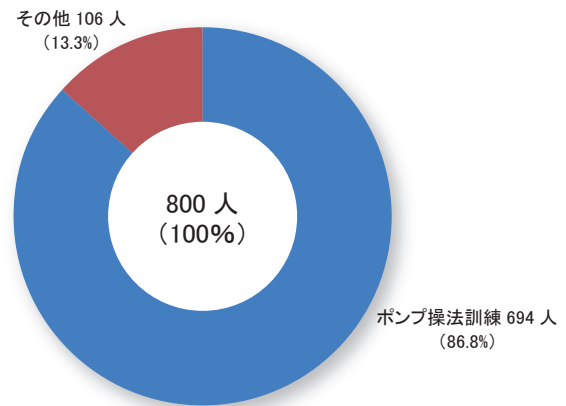


図2 演習訓練中の公務災害発生内訳

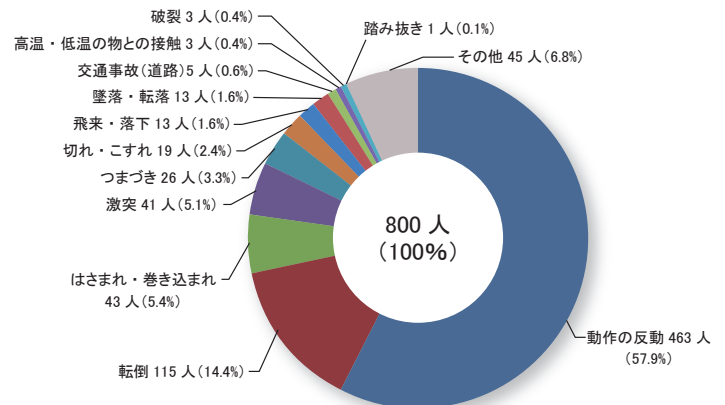


図3 演習訓練時における負傷者等の事故型別人数

14.4%)、「はさまれ・巻き込まれ」(43人、5.4%)が続きます(図3)。

次に、傷病部位別で見ると、「下肢」が478人で全体の59.8%を占め、次に「上肢」(99人、12.4%)、「胴体」(92人、11.5%)の順になっています(図4)。

傷病名別の人数では、「打撲傷・挫傷」が296

人で全体の37.0%を占め、次いで骨折(258人、32.3%)、「脱臼・捻挫」(105人、13.1%)の順になっています(図5)。

なお、演習訓練時の事故事例をいくつかあげますと、次のとおりです(表)。

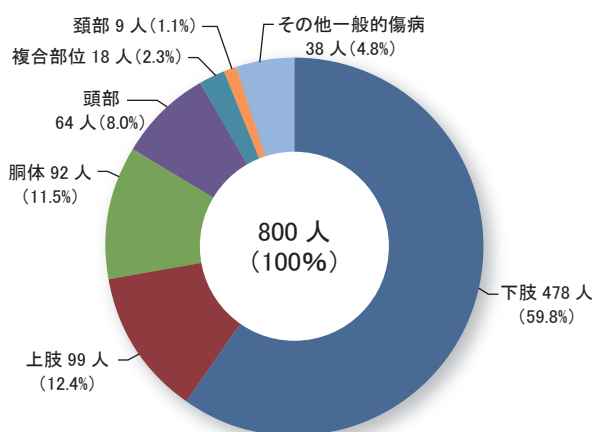


図4 演習訓練時における負傷等の傷病部位別人数

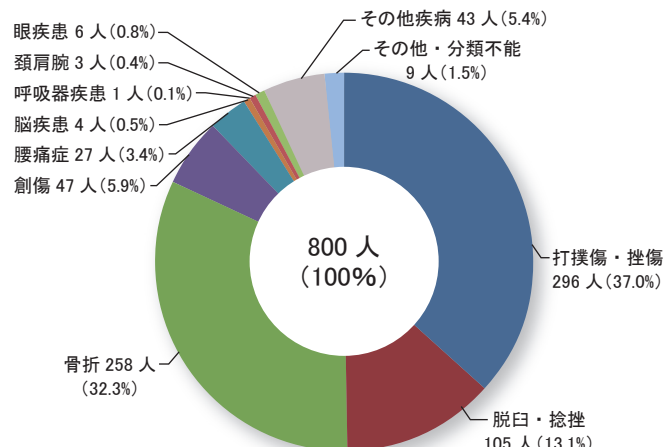


図5 演習訓練時における負傷者等の傷病名別人数

表 演習訓練時の事故の主な事例

事故の型	事故内容
動作の反動	小型ポンプ操法大会出場のための訓練中、吸管伸張操作で方向転換し駆け足しようとしたところ、アキレス腱を損傷した。(左アキレス腱断裂)
転倒	小型ポンプ操法大会競技中、放水の反動によりバランスを崩し、アスファルト上に転倒し、右肩を負傷した。(右肩関節脱臼)
はさまれ・巻き込まれ	消防ポンプ操法競技大会出場のための訓練中、4番員として車両から降りドアを閉める際、左手薬指の第一関節を挟んだ。(左第4指末節骨骨折)
激突され	分団機庫内でホースの収納のためホース棚にホースを上げようとしたところ、メス金具が前歯に当たり前歯が欠けた。(歯牙破折)
飛来・落下	ホースを乾燥ボールに干すため、ワイヤー巻取り作業中、誤ってハンドルが抜け勢い余って手から離れ頭部に落下した際、ハンドルの角が頭部に当たり出血した。(頭部割創、脳出血の疑い)

4 公務災害防止のために

消防団員の公務災害はいつでもどこでも起こり得ます。

消防基金は公務災害防止のために、4種類の研修事業(「消防団員安全管理セミナー」「S-KYT(消防団危険予知訓練)研修」「消防団員健康づくりセミナー」「消防団員セーフティ・ファーストエイド研修」)を推進しており、市町村等の行

う研修を積極的に助成・後援しています。消防団員の安心・安全を守るため、ぜひ当基金の研修事業をご利用ください。

研修事業の詳細は、お気軽に当基金企画課までお問い合わせください(03-3595-0544)。

当基金ホームページの「各種ダウンロード」からもパンフレット『研修会のごあんない』がダウンロードできます。

消防基金

検索